

## 序

本道の稲作は減反の大巾強化と品質較差の導入という厳しい状況におかれ、更に消費者からは道産米はまずいと批判を受けている。一方、道産小麦はここ数年来畑作地帯、転換畑ともその作付が急増し、生産量は全国の過半を占めるに至っているが、反面実需者からは用途に適した良質のものを供給せよとの声が強い。

これらの背景、実需者の要望のなかで、生産者は良質生産への認識をあらたにして、良質品種の導入、良質生産栽培への努力をしているところである。

幸い、水稲については昭和55年度から「優良米の早期開発」として、小麦については昭和56年度から「良質小麦の早期開発」として予算措置がはかられ、一方生産者からは小麦の育種強化関連施設、備品について多大の支援・協力をいただき、両者の良質化へ向けての育種試験が更めてスタートした。

この間、品質的にみて従来の品種に優る水稲の「しまひかり」、「みちこがね」、小麦の「チホクコムギ」が道の奨励品種として普及に移されているが、必ずしも生産者、実需者の要望に充分応えるものではない。このため、育種のスピードアップをはかるため、北海道立農試関係職員をもって夫々プロジェクトチームを編成し全力をあげて良質品種の早期育成に取り組んでいるところである。

たまたま、水稲、小麦とも試験のねらい、方法に共通面が多いところから、去る4月7～8日北見農試を会場に「水稲、小麦の良質品種早期開発に関する合同打合せ会議」を開催した。両チームメンバーが集り、品質検定、品質と重要形質の関係などについて得られた知見や情報の交換を行い、今後の良質化研究計画について率直な意見交換と協議を行った。また、この打合せ会議に御出席いただいた北大農学部の後藤寛治教授からは特別講演を、北海道農試の松本武夫場長からは今後の国の育種研究紹介で夫々有意義な御指導と御示唆をいただいた。

これらの内容はいずれも今後の研究推進に大いに役立ち得るものと考えられるので、担当者のハンドブックとしてとりまとめたものである。

併せて、本書が各関係者の指導上の参考資料として利活用いただければ幸いである。

編集委員長

長内俊一\*

編集委員

森 義雄\*\*      中村 文士郎\*\*  
仲野 博之\*\*      男 沢 良吉\*\*  
馬場 徹代\*\*\*

- 
- 上川農業試験場
  - 中央農業試験場
  - 北見農業試験場